
トラスト物語

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラスト物語

【Nコード】

N8459Y

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

ウムブラ王国を襲ったダークドラゴンからウムブラ王国を救った英雄、そしてダークドラゴンの契約者として有名な父。コンストラクター

しかし、父の弟トゥレチェの手によって父は殺され、主人公トラストは家族とバラバラにされてしまう。

トラストは、父の復讐を誓い行動を起こす！

プロローグ

人が、魔物という脅威を自らの力とする方法に気づき、100年余り。人の世界に、契約者（コントラクター）という魔物を使役する人が増えていった。

フェッセ大陸の中央に位置し、北と東を山に囲まれているウムブラ王国の首都【グラーツィア】に家を構えている、トラスト・フロウは父のジェイ・D・フロウの弟、そして叔父上であるトゥレチェ・フロウに会えるのを楽しみにしていた。

ある日を境に、父と会わなくなりいつの間にか【グラーツィア】から南10キメルにある【パッシェ】という街に住んでいると聞き、悲しんだ。その日までは、王宮で使えている父の代わりによく遊んでくれた楽しい思い出がいっぱいだったのだ。

そんな叔父が、久しぶりに父を自分の誕生日に招く手紙を送ってくれたのだ。何故か渋っていた父を、何とか説得し行くことが決まった日から、この日が来るのをどれだけ楽しみにしていたことか。

「父上！ 父上！ 早く！」

急かして来る息子のトラストの様子に苦笑を浮かべながら、ジェイは妻のシルビアが娘のシオンの身支度を整え終えるのを見る。

シオンは、身支度が終わると笑顔で兄のトラストへ走っていく。シオンもトゥレチェに会えるのを楽しみにしているという事だろうと思う。

しかし、そんな子供たちの笑顔とは逆に、こちらの気は重くなっていく。何故、こんな時に弟は、私に会おうとするのか。

ウムブラ王国の南西にあるルークス王国。そこに攻めようとする陛下を、私が押し止めているこんな時に。

「父上！早くしないと遅れるよ！」

息子に促され、家の前に止まっている弟の迎えである馬車へと歩く。トゥレチェは、自分の考えすぎだ、息子たちの笑顔を大切にしようと思理やり嫌な考えが過ぎる思考を切り替える。

【グラーツィア】を出てから、3時間。漸く目的地に着いたのか動きが止まる。少しすると、馬車の扉が開けられる。開けられた先には、弟のトゥレチェが疑いたくなるほどの笑顔で、こちらが降りてくるのを待っていた。

馬車が止まり、扉が開けられると叔父上の姿が見える。叔父上の姿が見えると、シオンの手を引き、馬車を降りる。そして、叔父上の前へと走りより笑顔を向け、久しぶりに挨拶をする。

「トゥレチェ叔父上！お久しぶりです。お誕生日おめでとう御座います」

「おお、久しぶりだな！ありがとう、トラスト。それにしても大きくなったな。2人は今いくつになった？」

「僕は12歳で、シオンは10歳です、叔父上！」

「そうかそうか、もうそんな年か！ついこの間まで、こんなだったのにな」

そう言うと、叔父上はトラストの臍の辺りを示す。それに、顔を膨らませながらもトラストは叔父上の手を握り、叔父上の家へ入ろうとしていく。

「叔父上、早く家に入りましょうよ！」

「おいおい、私の家なんだがな」

そう言いながらも、叔父上はトラストに手を引かれていく。そして、シオンも叔父上の手をトラストと同じように引きながら、家へと向かっていく。

そんな息子たちの様子に困った顔をしながらジェイとシルビアは、トウレチェの家へと入っていく。

家に入ると、すぐに長テーブルのある部屋へと案内された。入り口から、奥に父上、母上、そして僕にシオンが座り最後に叔父上が座った。

座ったのを確認すると、叔父上は両手を叩く。すると、入ってきたのは給仕ではなく鎧を着た兵士8人だった。その展開に頭がついていかず、兵士たちが自分たちの後ろに2人ずつ立つのを見守ってしまふ。自分の後ろに兵士が居ることに恐怖を感じ、震えていると叔父上が喋り始めた。

「トラストにシオン。すまないな、怖がらせて。だが、少し兄上に大事な話があるんだ。話が終わるまで静かにしていてくれ。そうすれば、兵士たちは何もしない」

叔父上に、そう言われトラストとシオンは恐怖に震えながらも首を何度も縦に振る。その様子に、叔父上は笑顔を浮かべると父上の方を見た。

すると、叔父上は呆れた表情を浮かべ顔を横に振る。

「兄上、そう睨まないでください。兄上がこちらの言うとおりにして頂ければ兵士は下がらせます」

「トウレチェ……!」

「そう怖い顔をしないでください。私は、陛下に頼まれただけです。兄上が契約しているダークドラゴン。その力を使い、ルークス王国を滅ぼすようにと……ね」

「ならぬ！　ダークドラゴンの力は抑止力だ。もし、戦争に使えば
ルークス王国だけではない！　我がウムブラ王国も滅びるしかない
ぞ！」

「ウムブラ王国の英雄、ジェイ・D・フロウ。本当は、兄上であれば
良かったが仕方ありません。ダークドラゴン……その力を私に譲
渡してください」

「ならぬ！」

「本当に、譲渡して頂けぬと？」

「くだい！」

「仕方ありません……残念です」

叔父上が頷くと、父の後ろに立っていた兵士2人が剣を抜き、父上
の口を塞ぎ、その剣を父へ突き刺す。そして、父の体から血が噴き
出しテールを血で汚す。そして、父を助けようと動こうとした母
も後ろに居た兵士に剣で刺される。

「父上！　母上！」

「父様！　母様！」

父上と母上の刺される姿を見て、トラストとシオンは叫ぶことしか
出来なかった。泣き叫ぶトラストとシオンを兵士たちは部屋の外へ
と連れ出そうと動く。トラストは、兵士に部屋の外へ連れ出されそ
うになりながらも、叔父上に叫ぶ。

「叔父上！　何故！？　何故、父上と母上を殺したんですか！」

「トラスト。貴方の父上は、力を持ちながらも、その力を国の発展
の為に使おうとしなかった……その罰です」

「そんな理由で！？　放せよ！　父上と母上の仇を！」

「お前ら、トラストとシオンは黙らせて何処かの奴隷商に売って来
い！」

（子供の命まで取る必要はあるまい……）」

兵士たちによって、気絶させられたトラストとシオンを横目に見ながら兄であるジェイの死体から浮かび上がるリングに目を奪われる。これが1度、この国を滅ぼしかけたダークドラゴンのコントラクトリング。

逸る心を落ち着かせ、自分の人差し指をナイフで切る。切った痕から出てくる血を、そのリングに1滴垂らす。すると、そのリングは1度光を放つと消滅する。そして、再びトゥレチェの右手首に現れる。その現れたリングを見やり、トゥレチェは笑いを抑えることが出来ず辺りに響かす。

「くくくう、あははははは！！　これで、私は！」

トゥレチェは、そのダークドラゴンのコントラクトリングを手にくぐにウムブラ王国の首都【グラーツィア】を目指し、陛下へと謁見する。

陛下は、トゥレチェとの謁見後。すぐに、ルークス王国へと宣戦布告する。宣戦布告をすると、ウムブラ軍はすぐにダークドラゴンを実戦へ投入する。ダークドラゴンの投入のためルークス軍の頑張りも空しくルークス王国は10日弱で滅び、ルークス王国の領土は、ウムブラ王国となった。

ブログ（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第1話（前書き）

2011／11／26 加筆修正

第1話

あれから、6年。そう父上が叔父上に殺されて、僕が奴隷に成り下がりスキアという街で、剣闘士という生活を強いられて6年だ。

何度、死にそうになった事か。だけど、トゥレチェへの復讐という思いだけでこれまで生きてきた。いつか、必ず生きてスキアを脱出し、トゥレチェを殺し父上の仇を取る。そして、妹シオンを見つけだし母上の元に帰るんだ。

「さあ！ やって参りました！！ 本日のメイン闘技！ 東、トラスト！！」

闘技場へ続く通路で待機していたトラストは、そう呼ばれると闘技場へと歩き出す。

闘技場へ出ると、周りから歓声が起こる。しかし、トラストはその歓声に応えることなく対戦相手が出てくる入り口を凝視し続ける。

司会者は、そんなトラストの様子を気にした様子もなく、盛り上げるべく更に相手の戦績などを言ってから、漸く対戦相手の名前を叫び始めた。

「西、ジルバ！！」

司会に、呼ばれ西の入り口。トラストが睨む先の入り口から、トラストと同じく薄汚れた布切れを纏った13〜14歳ぐらいの少年が姿を見せる。

しかし、その姿には少年らしい雰囲気を感じられず、代わりに殺伐とした雰囲気を感じていた。

それも、当たり前かと思う。この場所で、そんな雰囲気を残していたら生き残れない。そして生き残るために俺も、恐らくこいつジル

バも同情なんて気持ちはとつくの昔に捨てているはずだと思う。

「勝負開始!!」

司会から試合開始の言葉が出ると、ジルバはトラストに向かって走ってくる。そして、殺気を撒き散らし、右手に持っている剣を振ってきた。それを、トラストは体を横にずらし攻撃をかわす。

トラストはジルバの攻撃をかわすと、相手の首を目掛けて剣を振るう。しかし、ジルバは剣を引き戻し、トラストの剣を受け止める。ジルバは、受け止めるとトラストの剣を弾き、隙を作る。

トラストは剣を、弾かれ隙を見せてしまうがジルバが大きく剣を振りかぶってくれたおかげで、ジルバが剣を持つ右手首を掴みジルバを地面に引き倒す。そして、倒れたジルバの心臓に向かってトラストの持つ剣が突き刺さる。

「いや……だ! 死にたくない……!」

最後に、何かを言ったジルバを一瞬だけ見やりトラストは虚空に視線を送り司会が試合の終了を合図するのを静かに待つ。

「勝者! 東、トラスト!!」

「(僕は、自分が生きるために他人を殺す……)」

司会が終了の合図をすると、閉じられた東の入り口が開けられる。トラストは、ジルバの血に濡れる剣をそのまま持ち東側の通路を歩く。トラストは、通路を真っ直ぐ歩いていると右手に食堂があり、食堂へと入っていく。

食堂へ入ると、長テーブルが6個並べられており今日の試合を終えた人間が食事をしていた。トラストは、カウンターで食事を貰い空いている席に食事を置き座る。

静かに、食事をしていると近くで食事をしていた数人の人間が細々とトラストに声を掛けてきた。

「トラスト。此処を出たいと思わないか？」

「なんだ、いきなり？」

「此処を出るんだよ！ 嫌じゃないのか！？ 死ぬまで見世物にされるんだぞ！」

「嫌に決まっているだろ！ だが、そう思い行動を起こして失敗した奴らがどうなったか知っているだろ？」

そう声を掛けてきた奴の言葉にトラストは、こちらの思いも知らずにといい声を荒げてしまう。しかし、相手は声を荒げたことを気にした様子もなく話を続けている。

「だから、人を集めているんだ。人を集めれば脱出に成功する人間も出てくるだろう。だけど、もし失敗しても恨みっこ無しという条件だけだな」

「いいだろう……いつだ？」

トラストは、自分が失敗するとは考えず相手の提案を受ける。

「2日後。皆で暴動を起こす、その隙にそれぞれ逃げるんだ」

食事を終え、自分が眠る牢屋へと戻る。牢屋に戻ると、床に直接横になり先ほど男に言われた暴動の話を思い出し自分の脱出ルートを考える。

第1話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第2話（前書き）

お待たせしました。第2話です

第2話

食堂で、暴動の話を聞き2日経った。そう、もう暴動を起こす当日になっていた。トラストは、緊張で心を押し潰されそうになりながらも自分が入っていた牢屋を、離れる。

牢屋を出ると、そのまま食事をするため食堂へと向かう。食堂へ着き、カウンターで、今日の朝食を受け取り入り口から一番遠い奥の空いている席へと座る。席へ座り、トラストはふと気まぐれに周りに居る人たちを見回す。

食堂に居る人間が纏う雰囲気は、今日の試合で死ぬかも知れないという緊張とも、脱出に掛けるこれからの未来を思っの緊張。両方と感じられる何とも固い雰囲気を食堂全体に蔓延させていた。

この食堂に居る何人が今日のことを知っているかは知らないが、この雰囲気になるのは仕方がないと思う。トラストだって、緊張しているのだから。

食堂の緊張した雰囲気を感じながら食事を進めていると、入り口に槍を持った兵士が2人左右に立ち、その間に豪華な服に身を包んだ男が立っていた。

「貴様たち、今日の闘技には我がウムブラ王国の英雄で在らせられるトゥレチェ・D・フロウ様が見に来られる。貴様達、くれぐれも不甲斐ない試合を見せるんじゃないぞ！」

豪華な服を着ている人物から発せられた思いもよらぬ言葉に椅子が倒れる音を食堂内に響かせながら、立ち上がってしまう。その音を聞き周りで食事をしていた人間は、どうした？ と問いかける視線をトラストに向ける。しかし、トラストは自分が見られているとも気づかずに、落ち着け！ と自分を落ち着かせようと精一杯だった。そして、いつまでも立ち続けているトラストに気を悪くしたのか男

が眉を顰めてトラストに顔を向ける。

「貴様！ 座れ！」

トラストを見た男が、そう怒鳴りながら側に控える2人の兵士にトラストの方向を指し示すと兵士2人は槍を構えながら、トラストへと急ぎ足で駆け寄っていく。

未だに、立ち続けるトラストの後ろから左右に挟み込むように兵士2人は立つ。そして右に立つ兵士がトラストの左肩を、槍の刃の逆位置する石突きで叩きトラストの意識を自分にへと向けさせる。

トラストは、左肩を叩かれた様な気がして後ろを振り向く。すると、そこには入り口に居たはずの兵士2人が、槍を構えた状態で自分の左右に立っている状態だった。その事に少し驚きながら、兵士が用件を話し出すまで待つことにする。待つことにするといっても、奴隷である自分たちは同じ奴隷同士以外では話す権利さえ持っていないから、待つことしか出来ないのだが。

「貴様！ カトウーロ様の言葉が聞こえなかったのか！？ さっさと座れ！」

右に立っていた兵士が、そう言ってきた。カトウーロってのは入り口に立っている男。そいつが、何かを言っただけだが自分がカトウーロのお言葉を無視したから、カトウーロの側を離れ此処まで来たという事なんだろう。

トラストは、この場で騒ぎを起こし脱出のチャンスを探すつもりは無い。ため素直に兵士に言われた通りに、倒れていた椅子を直し腰掛ける。

トラストが、素直に腰掛けるのを見た兵士2人はホッと安心した表情を見せた。大分、緊張していたようだった。たぶん、兵士2人はトラストが暴れて周りに居る奴らも触発されて、暴れられたら幾ら

装備を固めようとも勝てないとわかっているのだから緊張するのも当たり前かと2人を見る。

そして、2人は直ぐに意識を引き締めトラストから離れていく。トラストから離れて、入り口まで100トルメ。丁度、部屋の中央に差し掛かると兵士2人が考えていたことが現実となる。

一斉に、トラスト以外が立ち上がったのではないかと思うぐらいの奴隷が立ち上がったのだ。そして、兵士の近くに居た奴隷たちは何が起こったのか分からず突っ立ったままの兵士から槍を奪い取り、即座に槍を兵士の心臓の部分へと突き刺す。

槍を心臓に突き刺され、血を噴き出しながら兵士2人は絶命し床で血で汚しながら倒れる。そして、何が起こったのか分からない内に護衛である兵士2人を失ったカトウーロは、悲鳴を上げながら何処かに走り去っていった。

トラストは、食堂内でのいきなりの出来事に驚き呆然と笑い出す奴隷たちを見やる。まさか、この場で暴動を起こすとは思ひもしなかった。確かに、起こすタイミングはチャンスがあればと聞かされていたが、てっきり闘技中に起こすものだと思っていたのだ。

「では、皆^{みんな}！ 外で会おう！！」

そう男が、大声で言う。奴隷たちは雄叫びを上げながら食堂を離れていく。トラストも、呆然としている場合ではないと思ひ氣を引き締め、皆が食堂を出て行く所を食事を受け取るカウンターへと走りより、体をカウンターの上に横たえらせ乗り越える。

乗り越えた先には、騒ぎのためか作っている途中の料理を放棄した跡を残し誰一人居ない状態だった。が、トラストは氣にした様子もなく奥へ続く扉を潜る。

扉を潜った先には、たぶんコック達の更衣室か何かに続く上り階段と、『この先、危険！』と書かれた木の立て札が立てられている下り階段があった。トラストは、その『この先、危険！』の立て札を

1度見ると、深呼吸をし階段を下りていった。

階段を降りると、階段の先に壊された鉄格子がある以外何もない空間へと出た。トラストは、そのまま鉄格子を潜ろうとすると後ろから声を掛けられる。

「おい！ ちょっと待ってくれ！」

トラストが、後ろを振り向くと腰の部分に2本の剣を差している長身の男がゆっくりと歩いて来ている所だった。そのゆっくりとした動作につい、いらぬ声を掛けてしまう。

「無事、外に出たかったら急いだほうが良い」

「あはは、兵士に捕まる心配？ 君……もしかして此処の事。何も知らない？」

未だに、ゆっくりとした動きでこちらに近づいてくる男に注意をしたつもりが笑われてしまい気を悪くする。そして、つい素っ気ない態度を取ってしまう。

「何を？」

「あはは、ごめんごめん。気を悪くしちゃったかな。でもね、この道で心配するべきは、自分の命だよ」

「どういことだ？」

「何、簡単な事さ。この道の先には、魔物が生息している洞窟に繋がっている。何故、そんな入り口が存在しているのかは分からないが、魔物が追手の代わりに逃亡者を殺してくれると言うわけさ」

トラストは、男に言われた事を一瞬だけ考えるが自分の目的は復讐だ。もし、復讐の前に命を失うなら、復讐に対する想いが足りなかったとそこまでだったと諦めるさと考え、男を無視しそのまま鉄格

子の先へ行こうと歩き出す。

「だから、待ってっ！」

トラストは再び律儀に足を止め、後ろを振り向くが視線にさっさと用件を話せという気配を含ませる。すると、男が視線に込められた言葉に気づいたのかは分からないが声を掛けてきた理由を話し出した。

「この道を選んだのも何かの縁だ。外まで一緒に行動しないか？」
「好きにしろ」

男の提案に、トラストは素っ気なく答え今度こそ鉄格子を潜る。トラストの行動に、今までゆっくりしていた男が慌てて鉄格子を潜ってくる。

「ハロス！ ハロス・リーパーだ！ 外までだけど、よろしくな！」

よろしくと言われ、トラストは三度ハロスと名乗った男へと振り向く。振り向くとハロスは、腰に差していた剣を1本鞘ごと抜き取りトラストへと差し出してくる。何故、差し出してくるのか分からず受け取らずにいると、ハロスは苦笑を浮かべて喋りだした。

「この先、魔物が居るって言っただろう？ 素手で戦うのは厳しいぜ？」

「ああ、ありがとう。……トラスト。トラスト・フロウ」

トラストは、お礼を言いハロスが差し出す剣を受け取る。剣を受け取ると後ろに振り向き、自分の名前を名乗って歩き出す。ハロスはその場で立ったまま、トラストが名乗ったその名前を何度も口に出

し頭に刻み込もうとしている。

トラストは、そのハロスの行動に気づいた様子もなく歩く。途中で、ハロスが距離が離れていることに気づいて、覚えたばかりのトラストの名を連呼しながら駆け寄ってくるのだった。

第2話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第3話

「はっ！」

途中で一緒に行くことになったハロス・リーパーという男と、どういう訳か、壁に立て掛けられている松明を目印に洞窟の先を進んでいると大量の緑色の皮膚をした魔物、ゴブリン。それにコウモリの姿をした、ブラッドバットと遭遇し2人で協力して戦闘を行った。

トラストは、上空から来るブラッドバットの羽を目掛けて振り上げ地上へ落としていく。その隙に、手に持っている棍棒を振り下ろしてトラストを攻撃して来ようとするのをハロスが剣で弾き、切り伏せる。

更に、そのハロスの隙を衝いて攻撃を仕掛けてくるゴブリンやブラッドバットの攻撃をトラストが、カバーし敵を倒していく。

そして、お互いの隙をカバーし合い10分以上の戦闘の末大量の魔物たちの排除を終わらせた。

トラストが、戦闘を終えひと息吐いているとハロスが、倒したばかりのゴブリンやブラッドバットの死骸の近くにしゃがみ込み、コソコソと何かしているのが目につき、疑問に思い何をやっているのかと問い掛ける。

「何って……素材を回収してるんだよ。ほら、トラ。素材回収手伝えっ！」

「トラ……?」

トラストは、なるほどなと納得しているとハロスから出てきた聞きなれない単語に、聞き返してしまう。何だ、トラってまるで猫に付ける名前じゃないか。

「ん？　トラストって何か言い難いじゃん。だから、略してトラって訳」

「あ、ああ、そうか。だけど、その呼び方。やめてくれないか？」

言い難いのかとも思いながらも、絶対にトラって呼ばれるのだけは嫌だ。だから、何としても普通に名前を呼ばせなければと取り合えず、正直に頼んでみる。

「やめんの？　んー、トラストって呼び難いし、何より何か可愛くないからなく。やっぱ、無理。俺は、トラって呼ぶぞ！」

そのハロスの発言に何が、何より可愛くないからだと言顔を顰めながら思ってしまう。

「可愛いかわ可愛くないかの問題じゃないだろ！　俺が嫌って言うってんだ！　普通にトラストって呼べ！」

「何を言う！　トラって呼ぶだけで、お前のその殺気を纏っている雰囲気は少しはごま……誤魔化せるはずだ！」

ハロスが、素材を回収していた手を一瞬止めてこちらを振り向いて言葉を紡いでいたが、一度言葉を詰まらせると顔を戻し、手を動かして最後にそう言ってきた。それを聞いたトラストは、こいつ絶対誤魔化せてないって思ったなと思い、お前！　と言おうとすると先にハロスが喋ってきた。

「それに、トラと俺は外に出るまでなんだ。呼び方ぐらい外に出るまで我慢しろよ」

ハロスのその言葉に、何だか釈然としない気持ちになりながらもそ

うだなど納得してしまい、トラストは渋々ハロスに分かったと答えた。

「分かったら、トラ。早く、素材の回収手伝えよ!」

「悪いハロス。こいつらの素材は、どこを取ればいいんだ?」

トラストは、自分がどの部分が素材になるのか知らないためハロスに聞いた。すると、ハロスは驚いた顔をしたと思ったら直ぐに何か自分の中で納得できたのか、なるほどと頷いてトラストの質問に答えてくれる。

「ブラッドバットは、口から生えている牙。んで、ゴブリンは棍棒。取り合えず、棍棒は3本だけ。それ以上は荷物の邪魔になるから牙だけ取れば良いさ」

そして、ハロスはトラストに自分が腰に身に付けていた袋をこちらに渡してくれる。使っている布の種類が違うのか、色が違うところもあり所々小さな穴が開いているボロイ状態だった。

トラストは、袋を受け取るとブラッドバットから30本程の牙を抜き取ると袋が一杯になったため、ゴブリンの棍棒を3本を回収し回収を終えた。そして、既に回収を終えていたハロスに近寄っていく。トラストとハロスは、外に近づく道を進んでいく。時々、ゴブリンやブラッドバットと戦闘になるが、最初に遭遇した様な大勢ではないため2人は特に苦勞することもなく戦闘を終えていく。

そして、洞窟を進み約1時間。漸く松明以外の光を目の前に見つけた。その見つけた光に2人は、出会ってから初めて笑顔を見せあう。そして、出口に向かって2人は一緒にゆっくりと歩いていく。しかし、途中でハロスが何かに気づいたのかトラストの前に、手を出し止める。

トラストは、止められた事に何だと思いいハロスに顔を向けると右側

の壁を凝視していた。

「どうした？」

「いや……。トラは、何か感じないか？　壁を突き進むような振動を」

そう言われ、トラストは周囲の壁を見る。しかし、周囲の壁に特に異常はなく次は耳を澄ませる。数秒、澄ませていると確かにハロスの言うとおりで何か重く固い物同士がぶつかり合い砕けるような音が聞こえてきた。

トラストは、その音を頼りにもう一度周囲を見る。その間にも音は大きくなっていき、音が自分たちの上。天井から聞こえているのに気がつき2人は、揃って上を見る。

上を向くと、洞窟の破片が落ちてきていた。時間が経つにつれ崩れてくる破片の量が増えていき、2人は厳しい顔をしながら後ずさっていく。

ドガアンーーーー！！！！

2人が後ろに下がっていると、先程まで立っていた辺りの天井が突然崩れ砂埃を辺りに撒き散らす。そして砂埃が晴れるとそこには、赤く光る丸い宝石にも見える物体を中心に、人型を岩で形成している存在が居た。

「何で、此処にゴーレムが！？」

「ゴーレム！？　でも、大きさが！」

そうトラストの目の前に居るゴーレムと言われた存在は、どう見ても身長2メートルぐらいしかないのだ。トラストが、聞いたゴーレムの大きさは200メートルを超えたりしている。だから、目の前

に居るのはゴーレムではなく別の魔物ではないかと思ってしまう。しかし、ハロスが言う。ゴーレムは、場所や契約者の力量によってその大きさが変わってくる。だから、大きさをゴーレムと判断している訳ではないと。ゴーレムと判断するのは、中心部分にあるあの赤い物体が契約の腕輪だ。

そして、野生のゴーレムを倒すには中心部分にある物体を破壊するしかない。

「説明、ありがとう！ でもな、せめて反撃もしてくれてると助かったんだが！」

砂埃が晴れゴーレムが姿を現すと、ゴーレムはこちらを敵と認識したのかゴーレムの名で、スピードは遅いと思っていたトラストは認識を間違っていたと思い知った。

人型の小さな体のおかげか、人間と同じぐらいのスピードで走って攻撃を仕掛けてきたのだ。トラストは、ゴーレムの攻撃を避けながら反撃をしていたが、ハロスはゴーレムの攻撃を避けながら、反撃の変わりにゴーレムの説明をし始めていたのだった。

確かに、ゴーレムと初めて相対するトラストには説明は助かったんだが、戦闘中は、倒し方や弱点だけで他の部分は終わってからでも良かっただろと思う。

「悪い悪い、トラ。何かやるなら自分の気が済むまでやらないと落ち着かないんだよ」

ハロスは、そう言うとおりにゴーレムの説明に気が済んだのか攻撃を始めた。ハロスが、攻撃をしてくれる様になりトラストも攻撃に集中する。

ゴーレムを挟み込み、交互にゴーレムを攻撃し気を散らす。気を散らした隙に、それぞれのタイミングで中心部分の赤い物体に攻撃を

当てていき、傷を広げていく。

赤い物体の傷が大分広がると、ゴーレムが焦ったのか周りにある石や石の破片を集めて大きな岩へと6個も形成し自分の周りに配置する。配置した岩はゴーレムの周りを高速で回転し近寄ることが出来なくなってしまった。

ゴーレムは、自分の周囲を回転する岩を攻撃にも使ってくる。6個存在する岩をトラストとハロスに向かって飛ばしてくる。トラストとハロスは、それを避けて攻撃に転じようとするが、飛ばした岩はブーメランの様に、元の位置に戻ってくる。そのため、直ぐに後ろに下がらざる終えなかった。

「はぁはぁ……くそ！ これじゃ、倒せねえ……！」

「はぁはぁ。確かにこのままじゃ、体力に限界のある俺たちがやられるな」

「あの岩を……はぁ……どうにか出来れば……！」

そんな会話をしながらも、ゴーレムは容赦なく岩を飛ばしてくる。それをトラストはいつも通り回避し、戻ってきた岩も回避する。しかし、ハロスは飛んできた岩を避けたと思いきやその岩に向かって剣を振り下ろした。

すると、その岩は剣を折ることが出来ず逆に何の抵抗もなさそうに真っ二つにされた。それを見た2人は一瞬驚いてしまい体の動きを止めるが、直ぐに岩が飛んでくるのに気がつき避ける。そして、トラストも先程ハロスがやった様に岩に向かって剣を振り下ろした。そして、見たときに感じた様に特に抵抗もなく真っ二つに切ることが出来た。

「くそっ！ 見かけだけかよ……！」

トラストは、今まで振り回された岩に、溜まっていた鬱憤を晴らす

が如く残り3個の岩も躊躇なく切り裂いていく。そして、岩という守りを失ったゴーレムの中心部分に向かって力を溜めて突き刺す。それを、見ていたハロスはいまのトラストの表情に動きを止めてしまいボソッと、

「俺の怒りは何処に……？」

呟いていた。

そして、トラストの渾身の一撃の突きによってゴーレムの赤い物体は粉々に砕けていった。赤い物体が砕けたことによって今まで形成していた体は、力を失い地面に落ちていく。そして、ボロボロになっていた剣も赤い物体が砕けたときに一緒に折れてしまった。

剣を失いながらも漸く、終わったとトラストが安堵しているとトラストの視線の先に金色に輝く腕輪が、浮遊していた。

それを見たハロスが、その腕輪の事をトラストは知らないと思うトラストに説明を始める。

「契約の腕輪。一定以上の力を持つ魔物を倒すと現れる腕輪。契約を望むなら、その腕輪に30秒以内に自らの血を1滴垂らすことによって契約が成立。その魔物を使役できる。トラ、剣も失っているし何より記念にゴーレムと契約してみろよ」

ハロスの説明に、それぐらい知っている！ と力なく怒鳴りつつもそうだなと思い、腕輪に近づきゴーレムの戦闘によって流れている血を腕輪に1滴垂らす。

腕輪に1滴血が垂れると、一際金色の光が強くなるとトラストの目の前から腕輪が消える。消えたと思ったその瞬間にはトラストの右腕に現れる。

「ゴーレムとの契約。おめでとう、トラ！」

「ありがとう。ハロス……助かったよ」

ハロスに、トラストは心から感謝を言葉にする。恐らく、ハロスがこの道を選んでいなければ自分は、このゴーレムによって殺されていたかも知れなかったし、契約をしたかったかは分からないが、ゴーレムとの契約を譲ってもくれたのだから。

「何、俺だってトラのおかげで助かっているよ。だから、俺も……ありがとう」

そう言うと、ハロスはさっさと外に出ようぜと示すかの様に出口へと目指し歩いていく。トラストも、腕輪を最後に見るとハロスの後ろについて行くように歩き出す。

第3話（後書き）

※感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8459y/>

トラスト物語

2011年12月1日20時46分発行